「苦悩の顔から快い笑顔へ」
ルツ記１：1－10、16－19

ユダのベツレヘムという町にある家族がいました。夫の名はエリメレク、妻はナオミ、そして二人の息子マフロンとキルヨン。この家族は飢饉によって故郷での生活が困難になり、モアブの地へと移住することにしました。では、一家は行った先で幸せに暮らせたかというと、そうはなりませんでした。移住して間もなく夫エリメレクが死に、モアブの女性を妻に迎えた二人の息子たちも死んでしまったのです。この息子たち夫婦には、子どもはいませんでした。息子たちの嫁のオルパとルツ、そしてナオミ、三人の女性だけが残されました。

この時、ナオミはモアブに来てからのことをいろいろと思い返していたことと思います。自分たちの判断は正しかったのだろうか。あの時、ユダの地に留まるべきだったのではないか。神さまの御心を尋ね求める祈りをしていただろうか。モアブに来なければ、愛する家族が死ぬことはなかったのではないか。いろんな思いに、ナオミの心は引き裂かれそうになったかもしれません。でも、その時、ナオミは主の言葉を聞くのです。「主がその民を顧み、食べ物をお与えになったということを彼女はモアブの野で聞いた」と。
「主が民を顧みてくださる」。この言葉に押し出されて、ナオミは故郷に帰る決心をします。それは、ナオミが、深い悔い改めの心をもって神さまのもとに帰り、その憐れみにより頼んだということです。父なる神様が私たちに与えてくださった最も大きな恵みは、悔い改めの道を備えてくださっていることです。それは祝福の道です。神さまは、私たちがどのような時にあっても、イエス・キリストによって私たちの罪やすべての過ちをあがなってくださるという愛を約束してくださっています。私たちは、このことを忘れることのないよう覚えておきたいと思うのです。

さて、ナオミがベツレヘムに帰ると聞いて、嫁のオルパとルツもついて行くと言います。ナオミは嫁たちの申し出を喜びますが、二人に「自分の里に帰りなさい」と強く勧めます。しかしながら、ナオミのこの懸命の勧めにもかかわらず、ルツは別れることをかたくなに拒み、「あなたの民は私の民、あなたの神は私の神」という告白をするのです。ここに神さまの御業のすばらしさ、またナオミという信仰者の生きざまを賛美せずにはいられません。
ルツは、モアブの神を崇拝する環境で育ち、生まれも育ちもモアブ人でした。だけど、そのルツが、主なる神を信仰する者となっていたのです。誰の影響でしょう？もちろんナオミの影響です。このことを通して、ナオミがモアブの地でどんな生き方をしてきたかを知ることができます。ナオミの信仰とその生活は、異邦の女性であるルツに、神を信じ、神を愛し、神の民を愛する心を与えたのです。

けれども、10 年ぶりにベツレヘムに帰って来たナオミは、町中が騒ぎ出すほどに哀れなものでした。ナオミは自分のことを、全能者が私をひどい苦しみに合わせたのですから、快い者ではなく、苦い者であると告白しています。けれども、本当にそうなのでしょうか。

ナオミは、「出て行くときは、満たされていたわたしを、主はうつろにして帰らせたのです」と言っています。確かに、人間的な目で見たら、出て行ったときに持っていたものはすべて失ってしまったでしょう。しかし、主はナオミをからっぽで帰って来させたわけではありません。ナオミのそばに、「あなたの神はわたしの神。あなたの亡くなる所でわたしも死に、そこに葬られたいのです。」とまで言う嫁ルツを着き添わせてくださったのです。そして、その恵みをナオミは確かに見ているのです。

異邦の地にあった時でさえ、苦しみの中にあった時でさえ、主が共にいてくださり、全能者の御手の中にとらえてくださっている。だから、私たちは希望を失うことはない。ルツの存在は、そのことをも告白しているように思えます。

使徒パウロは、『ローマの信徒への手紙』の中でこう記しています。「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています」（8：28）と。

神さまは、苦しみや私たちの間違った決断においてさえ、ご自分の計画を進めてくださる方です。私たちがたとえ間違って決断をしてさまようような時でさえも、神さまは、それさえも支配して導いてくださっているということです。それだからこそ私たちは立ち返ることができる。それだからこそ私たちは神様の計画は何なのですかと祈り、再出発することが出来るのです。でも、それはすぐには理解できないことかもしれません。私たちは、神さのご計画の、ほんの一部分しか見ることが出来ない。けれども、「神さまは、すべてのことを働かせて益と変えてくださる」。私たちも、この御言葉に信頼して歩んで行く者でありたいと願います。